小山工業高等専門学校研究紀要
第三十四号（二〇〇二）二〇三―二一二

円仁の入唐求法について ― 天台山へ行けなかった理由

Ennin's Pilgrimage to Tang China : Why He wer not able to Visit Mt. Tendaisan.

中田伸一

一 はじめに

平安時代には、遣唐使が二回海を越えた。延暦二十三年（八〇四）の使節と、承和五年（八三八）の使節である。最初の派遣となった舒明天皇二年（六三〇）以来、ほぼ二世紀の間に五千人以上の日本人が大陸の土を踏んだ。日本の国情はその間に大きく様変わりをし、大化改新、律令制をはじめとする諸制度の整備を経て、奈良時代、平安時代へと移った。平安期の遣唐使の果たした役割として、特に注目されるのは、「仏教東漸」の橋渡しをしたことである。空海、最澄、円仁らが、中国から密教や天台の教義を将来したことにより、平安仏教が成立し、後世の思想・文化に大きな影響を及ぼした。

政権の内部では、唐制の模倣あるいは導入が一段落をつげていたこと、国粋化が強まっていたことにより、遣唐使の派遣に熱心でなくなっていた。一方、安史の乱以降の唐の国内情勢は不安定に推移しており、受け入れ体制も変化していた。承和の使節派遣以降、五十六年後の寛平六年（八九四）、菅原道真を大使とする派遣計画が浮上したが、航海の危険や治安の乱れを理由に、大使自ら再考を促す上表文を提出し、中止になった。結局、承和の遣唐使が最後となった。これから話題にするのは、最後の遣唐使の一員として海を越えた天台宗の僧侶、円仁のことである。

円仁は延暦十三年（七九四）、平安時代幕開けの年に、下野の都賀郡に生まれた。誕生地については、今の岩船町説と、壬生町説の二つがある。祖先は崇神天皇の第一皇子、豊城入彦命という説があるが、確かなことは不明である。壬生氏という母方の姓を史伝（注1）は記している。早い時期に父親を失ったらしい。当時の下野には、日本三戒壇の一つである薬師寺があり、また、鑑真の指導を受けた道忠が布教に従事して、道忠教団を形成していた。九歳のときに、大慈寺に引き取られたが、そこの住職の広智も道忠の弟子であった。土地の人々は広智菩薩と呼んで敬っていたという。道忠・広智の人脈は最澄とつながっていたことから、壬生家の少年が十五歳になると、比叡山の最澄に弟子入りした。円仁の名はこのとき最澄から与えられたものである。最澄は四十二歳、唐から帰国して三年後のことであり、また、桓武天皇の後援を得て、天台宗を開基してから二年余り後のことであった。東国から来た若い円仁は、入唐求法した師のもとで修行に専念することになった。

円仁に中国行きの話が舞い込んだのは、それから二十七年後の、承和二年（八三五）、四十二歳の年であった。最澄の死より十三年が過ぎていた。二年続けて渡海に失敗したため、実際に中国の土を踏んだのは、四十五歳のときであった。彼の地に九年二ヶ月滞在して、承和十四年九月二日（唐の宣宗の大中元年、西暦八四七年）帰国した。旅の経過は『入唐求法巡礼行記』という日記に記されている。それは、官の記録に無いような、細やかな観察や洞察に満ちていて、読み物としてなかなか面白い。同時に、八四〇年前後の唐代の歴史、仏教、文化、地理、交通、外交、経済、言語、民俗等の貴重な記録にもなっている。駐日大使をつとめたことのあるアメリカの東洋学者、エドウィン・O・ライシャワー博士は、この日記をマルコポーロの『東方見聞録』に比肩しうる、第一級の旅行記とたたえた。

『巡礼行記』の原文は日本人にとっても難解な、特殊用語を多く含む漢文体で書かれている。そのため、一般読者には近づき難く、かつては天台宗の関係者や歴史研究者に限定的に知られるだけであった。

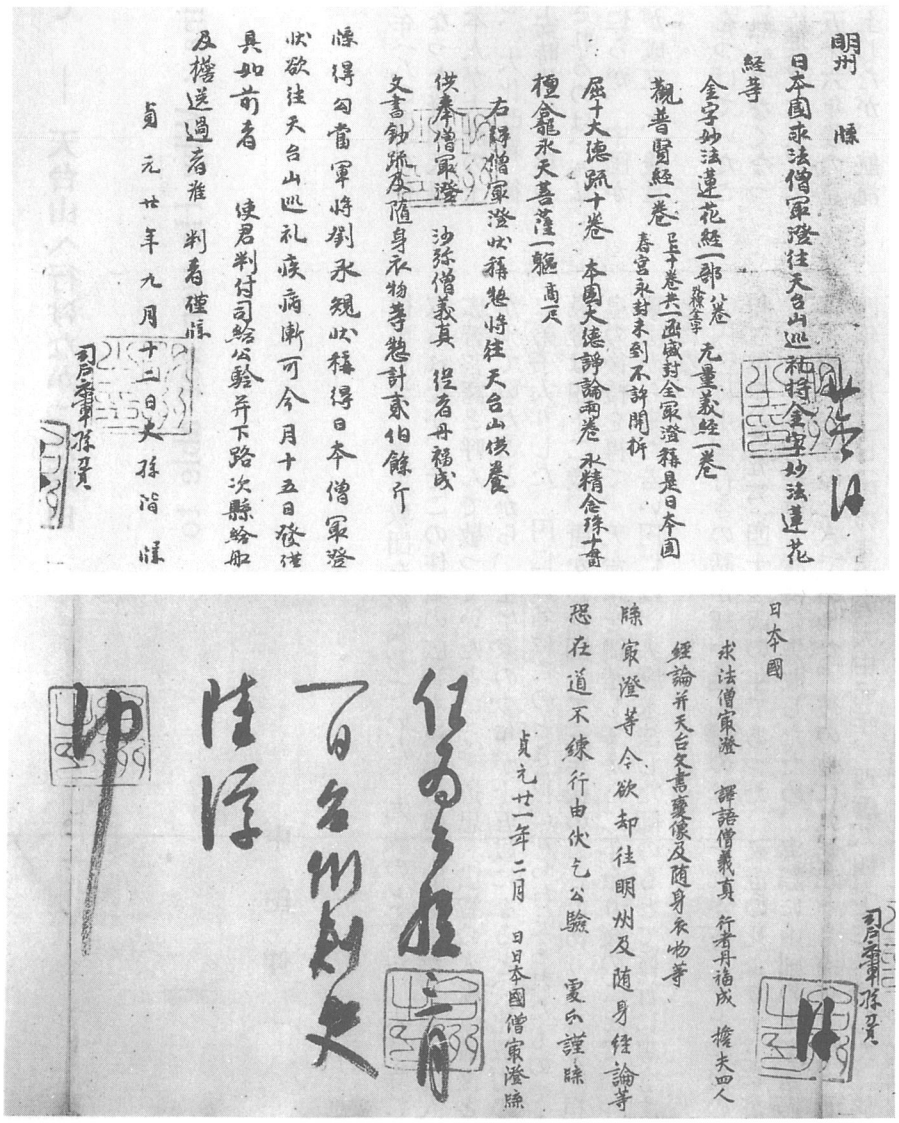
ライシャワー博士は、この難解な文献を二十年かけて英訳し、さらに、研究してその成果を二冊にまとめ、一九五五年に出版した。研究書の方はわが国では田村完誓氏の訳により『世界史上の円仁 ― 唐代中国への旅』の名で六三年に公刊された。その後ドイツ語、フランス語にも翻訳されたということである。国内でも『巡礼行記』あるいは円仁の研究は進み、今日ではあらかた出るべきものは出た感がある。

円仁が唐に留まった期間は九年二ヶ月に及んだが、初めから長期滞在を予定したのではなかった。当初は、天台山に登り求法と巡礼をし、目的を果たしたら遣唐大使らと共に帰国するはずであった。しかし、天台山へ行くに必要な「公験」(旅行許可書)が政府機関から発給されなかったため、八ヶ月ほど揚州で足止めを余儀なくされた。しかし、公験はとうとう発給されなかった。

「公験」はパスポートとヴィザを兼ねたような文書である。唐代において州を通過する旅行者はそれを携帯しなければならなかった。また、交通の要衝にある関津、つまり関所や渡し場を通過するには「過所」という身分証明書が必要であった。先学の考証によると、過所や公験を発行するのは長安にあっては尚書省、地方にあっては州庁であった。(注2)

写真の資料は、最澄が延暦期に入唐した際に与えられた通行許可書である。上段は上陸地の明州府が交付した文書「明州牒」と呼ばれるもの。冒頭に「日本国求法僧最澄往天台山巡礼」と身分と目的が明示され、次に日本から持参した経疏の品々と同行者の名前、今後の予定が簡潔に記され、最後に文書の起案者と判官の署名に官印が捺されている。下は「台州公験」と呼ばれるもの。最澄と同行者の名前、持ち物、台州から明州へ戻るための公験の発行を請う言葉があり、これを台州刺史の陸淳が「公験と為すに任す。三月一日。」と認定した体裁になっている。この二つの文書は最澄が日本に持ち帰り、延暦寺に今日まで残ったものである。

円仁の場合には、最澄と同じく天台山に行こうとしたが、同様の公験を得られなかった。そのため、目的を果たさずに帰国の舟に乗りこまなければならなかった。土壇場で下した決断は、大使一行と別れて中国に再上陸することだった。しかし単独行動となればなおさら公験を携帯しなければ旅行はできない。円仁は、天台山行きの公験を得るための粘り強い交渉を始めなければならなかった。交渉の過程で、目的地を北方奥地の五台山に変更する。



最澄の入唐牒(上段は天台山への往路に使った明州牒。下段は帰路に使った台州公験。共に延暦寺蔵。)円仁にはこの種の旅行許可証が交付されなかった。

こうした経過そのものが、円仁の旅行の性格を決定付けた。順調に行けば一年以内に帰国できた旅行が、九年二ヶ月の長期滞在になった。その理由は、円仁の求法の熱意が尋常でなかったことと、天台山への旅行許可証が得られなかったことによる。ではなぜ、天台山に行けなかったのか、本稿はこのことについて答えを出そうとするものである。

二　天台山・最澄・円仁

円仁の旅行目的は何か、上陸後に揚州府の質問を受けたとき自ら次のように回答した。「台州国清寺へ往くを請うは、師を尋ねて疑わしきを決するなり。若し彼の州に師なければ、更に上都に赴き兼ねて諸州を経過せん。」（開成三年八月四日の日記）

目的地は天台山国清寺と明言している。目的を達せられないときは上都つまり長安行きも念頭にあったことは注目される。目的とは「師を尋ねて疑わしきを決する」ということ、具体的に言うと、天台宗の教義上の疑問三十余箇条について、しかるべき師から解答を得ることである。目的や任務がどんな経緯で決まったか、次に確認しておく。

承和の遣唐使は、当初は六百人ほどの大部隊で編成されたが、円仁に与えられた身分は「請益僧」であった。それは仏教を学ぶ僧侶（学問僧）には違いないが、すでに高僧の域に達した実力のある僧侶が任命されるもので、さらなる専門的な研鑽を期待された身分である。ただし、行きと帰りは遣唐大使の日程に合わせるよう義務づけられたので、滞在期間は短くならざるを得なかった。その点は長期の留学を許される留学僧とは異なっていた。

承和の遣唐使に参加した僧侶は、円仁の他に天台留学僧の円載、真言請益僧の真済（しんぜい）、真言留学僧の真然（しんぜん）、三論留学増の常暁、法相請益僧の戒明、および義澄の七名であった。（真済と真然は第一次渡航の後、辞退して元興寺の請益僧の円行と替わった。）

円仁を請益僧として推挙したのは藤原常嗣大使、藤原三守（ただもり）右大臣、第二代延暦寺座主の円澄であったとされている。（注3）最澄は生前、円澄に依頼していたことがあった。しかるべき時期に、請益僧と留学僧を天台山に派遣して、天台宗の深旨を諮決させよ、とのことであった。その遺志を受けて円澄は、円仁を推挙したという。その根拠は『元享釈書』の円澄伝の一節である。（　）内は私の補足である。

先師（最澄）、往年語りて曰く、我れ帰朝の時、国清寺の座主と大衆とに白して曰ふ、本国に帰るの後、常に請益と留学の二僧を遣はし円教の深旨を決せしめんことを請はんと。我が滅後に、汝（円澄）は宜しく人を選び、海を跨（わた）らしむべし。

請益僧と留学僧を派遣することは、最澄が延暦の遣唐使の一員として天台山国清寺に行ったとき約束してきたことであった。その約束ごとが承和の世になり、請益僧の円仁、留学僧の円載という派遣人事により、実現したわけである。請益僧に選ばれた円仁は、それが最澄の宿願であったことを強く意識したであろう。

「慈覚大師伝」によると、円仁は遣唐使の勅令を受ける前後に三回ほど、夢のなかで最澄のお告げを聞いたという。

最初のお告げは遣唐使派遣が決まる直前であった。「夜夢あり。先師忽ち来たり、大師の膝に枕して語りて曰く。吾将に汝の求法の為に入唐せしめんとす。但し愴（いた）むらくは風波の上を漂流せん。船舫の中に辛苦せん。我甚だ之を愍む。」語り終わると円仁は夢から覚めた。程なくして朝廷より請益僧の勅命が届いた。

二回目のお告げは、「汝の旅中の装束は須らく人と之を等しうすべし。」というものであった。学問修業に行く身の上であれば、きらびやかな衣服である必要はなく、人並みでよい、という忠告である。夢から覚めると、右大臣の藤原三成から使者が来て、旅中の服装について問い合わせが来た。

三度目のお告げは、「汝大唐に往かば、真言門に就いては天部を学べ、天台門に就いては中道を学べ。」というものであった。

最澄は生前、自らの唐における求法活動について「海外に進むと雖も、真言道を欠く」と述べたことがある。（藤原冬嗣宛書簡中の一節）「真言道」は、空海が長安に留学したときに恵果和尚から伝授されたような、本場の密教であろう。それを学ばなかったことは最澄の負い目であり心残りであった。夢中の言葉は自分の果たせなかったことを、円仁に託した言葉と解釈できる。次に、最澄の入唐求法について簡単に触れておくことにする。

最澄は延暦二十二年三十七歳のときに第十六次遣唐使の還学生(げんがくしょう)として参加した。その年の一次渡航は暴風に妨げられて失敗したが、翌年九月一日に明州鄞県、今の寧波に漂着した。同月十二日に第一章で紹介したような「明州牒」の交付を受け、三日後の十五日にその南方にある天台山のある台州に向けて出発した。長安へ向かう使節一行とは自ずと別行動になる。台州では刺史(知事)の陸淳を訪ねた。彼は最澄に援助を惜しまず、さまざまな便宜を与えた。彼の紹介によって天台山修善寺の座主の道邃(どうすい)を知った。道邃は天台関係の書物を貸し与え、書写を支援した。天台山の国清寺に到着したのは十月十七日であった。上陸してからほぼ一カ月半後に目的地に着いたことになる。すこぶる順調な旅であった。

天台山国清寺は天台大師智顗(五三八～五九七)にゆかりの寺である。大師遷化の後、隋の開皇十八年(五九八)、晋王広(後の隋の煬帝)が大師の遺志に応えて築いた。「寺建たば国清まん」と智顗が遺言したのにちなんで、国清寺という名前になったとされる。以来、天台宗の根本道場となった。鑑真は天宝三載(七四四)日本僧の栄叡(ようえい)と普照を伴って国清寺に来ている。鑑真は日本に天台宗の教義を伝えた高僧でもある。

最澄の学んだ仏教は一言で言えば、「円密禅戒」の、四宗合同の天台宗であった。「円」は円教つまり天台宗の教えであり、それに密教、禅宗、戒律をそれぞれ浅く広く研修した。滞在期間は八ヶ月ほどであったから、移動時間を考慮するとかなり忙しい求法活動であった。

帰国した最澄は大陸の最新の仏教を修得してきたことに自信をもって帰朝報告をしたに違いない。当時、桓武天皇を始めとして、朝野の仏教への関心は高かった。とりわけ、密教への関心が集まった。ところが密教に関しては、最澄の持ち帰ったものは、密教の本流と言えるものではなかった。長安に行けなかったこと、修得するに足る時間がなかったことが決定的な理由であろう。それに対して、空海は長安の青竜寺の恵果和尚に半年ほど師事して、金剛界灌頂と胎蔵界灌頂を授かり、本格的な密教を修得してきた。密教に関しては、年若い空海の方が注目されるに至った。八一一年二月、最澄は高尾山にいた空海に書を送り、密教の伝授を要請している。翌年十一月末に高尾山において、最澄は空海より金剛界と胎蔵界灌頂を受けた。また、空海から密教の書物をしばしば借覧した。八一三年には、理趣釈を借覧しようとして手紙を出したが断られた。さらに最澄の弟子の泰範が、密教の勉強のために空海のもとに行ったきり帰って来なくなった。当時の最澄は自らの求法の不徹底を顧みて「海外に進むと雖も真言道を欠く」と述べたが、その負い目を晩年まで持ち続けたのであった。最澄は弘仁十三年(八一二)に入滅した。

円仁は最澄が「真言道を欠く」と言った無念の思いを理解していたであろう。最澄の成し得なかった課題は、自分たち後に続く弟子の課題であることを自覚していたであろう。円仁が請益僧を拝命したとき、師のやり残した仕事を果たす番が自分に巡ってきたことを強く意識したに違いない。

三　航海と公験 ―― 行路難の始まり

遣唐使が初めに出会う試練は海上の波風である。百五十人ほど乗り組んだ木造の帆船が、気まぐれな天候にいかに支配されやすいかを『入唐求法巡礼行記』の冒頭の文章は示している。文章は承和六年(八三八)六月の出発の日から始まるが、実際の旅は二年前から始まっていた。二年前の一次渡航のときは、船出して間もなく嵐に遭い失敗した。第三船はひどく破損して再使用に堪えず、廃棄された。一年前の二次渡航のときは、三船とも逆風に押し戻されて失敗した。

三度目の挑戦は、晩夏の六月十三日、博多湾から始まった。請益僧の円仁の姿は第一船にあった。藤原常嗣大使も乗船していた。第二船には小野篁副使が乗る予定であったが、船の姿も副使の姿も海上に無かった。出発の直前になって副使は病気を口実にして乗船を拒んだため、第二船は船の集結に遅れた。第三船は廃船になっていたから、博多湾には結局、第一船と第四船の二隻しか姿を見せなかった。

船出した十三日は海上に風が無く、三日間の停泊を強いられた。志賀島付近でも五日間風待ちした。西南の風が吹いて、一昼夜にして五島列島の有救(うく)島に着いた。ここより東風に乗って大海を横断するコースをとった。途中、第四船の位置を見失った。五日ほどして大陸の沿

岸に接近したものの、浅瀬に座礁してしまった。乗組員に緊張が走った。六月二十八日の『巡礼行記』は次のように記している。

爰に東風は切りに扇ぎ、波濤は高くして猛し。船舶は卒然趍って海渚に昇る。乍(たちまち)驚いて帆を落すに、柂角は摧折すること両度なり。東西の波は互いに衝いて船を傾け、柂葉は海底に着して舶の艫は将に破れんとす。仍って柂を截り、柂を棄つ。舶は即ち濤に随って漂蕩す。東波来たれば船は西に傾き、西波来たれば東に側つ。船上を洗い流すこと、勝げて計うべからず。船上の一衆、仏神に憑帰して誓祈せざるなし。人々は謀を失うる使頭以下水手に至るまで、裸身にして褌を緊逼す。船は将に中絶せんとし、遷って艫・舳に走り、各全所を覓む。結構の会は瀾に衝かれ、為に咸皆差脱したれば、左右の欄端に縄を結んで把牽し、競うて活途を求む。淦水は汎満し、船は即ち沈んで沙土に居る。官私の淦の随に浮沈せり。」

座礁した船にしがみつくような状態で乗組員は三日三晩を過ごし、七月二日を迎えた。事態は更に悪化していた。

船は沈んで泥に居り。前まず却かず。爰に潮水強遄にして舶辺の淤泥を堀決す。泥は即ち逆沸して、船は卒に傾覆し、殆んど将に埋没せんとす。人々は驚き怕れ、競うて船側に依り、各々褌を帯し、処々に縄を結んで繋居して死を待つ。久しからざる頃に船は復左覆し、人は随って右に遷る。覆るに随って処を遷すこと、稍数度に逮べり。又、舶底の第二布材は折れ離れて流れ去る。人々は神を銷し、涙泣して発願す。

このとき、遠く葦の茂みをかき分けて小船が近づいてきた。一足先に上陸した同胞の急派した救援船であった。使用に堪えなくなった第一船を乗り捨てて一行は救援船に移った。

遣唐使は彼の地に上陸すると、最も近い唐の地方政庁の保護を受け、指示を受ける。わが国で言う「遣唐使」を中国側は「朝貢使」と呼んでおり、唐の役人と日本の使節団の間の公的な交渉は、朝貢外交の儀礼をふまえて行なわれた。長安と地方政庁の役人は互いに連絡を取り合いながら、皇帝と大使の接見のお膳立てをした。承和の遣唐大使一行の入国から帰国に至る足取りを『巡礼行記』の記述をもとに概観してみる。

大破した遣唐第一船を降りて上陸した大使、判官(事務長官)、録事(秘書官)、円仁らはまず、運河を舟航して揚州府を目指した。航海中に離れ離れになった第四船は、はるか北方の青州に漂着したので、第一船の団員だけの行動であった。途中通過した海陵県では、県の高官の劉勉が紫衣を身に着けて慰問に来た。側近の兵士八人と村長も同席した。彼らは日本からの客人に酒と餅を贈り、音楽でもてなした。赤岸村というところでは、揚州府からの使者が来て、官給の食糧を供給した。

運河を舟行すること三週間ほどで揚州に到着。数日して八月一日に藤原常嗣大使は揚州府を訪ね、大都督の李徳裕に面会した。遣唐使が到着したことは揚州府から長安の朝廷に報告された。第四船の団員は一ヶ月近く遅れて揚州府に着き、大使等と合流した。九月九日、重陽節の日に、李徳裕は日本国使のために宴会を開いたが、藤原大使は出席しなかった。九月二十日、「朝貢使は来たって京に入れ」という朝廷からの指示が、揚州府を経由して日本側に伝わった。九月二十九日、李徳裕は長安へ赴く使節たちのために送別会を開いた。藤原大使以下、入京を認められた者四十三人は、十月五日朝、五隻の船に分乗して水路長安へと出発した。この日は終日雨が降っていた。揚州に残留した同胞は二百七十人であった。

円仁は天台山国清寺を訪ねることになっていたので、揚州に到着すると直ちに揚州府に公験(旅行許可書)の申請を働きかけた。大使一行が長安で朝賀に出掛けている間に用務を済ませ、帰国前に大使等に合流しなければならなず、時間の余裕はなかった。大使や録事ら使節の幹部も円仁のために支援をしたが、公験は交付されなかった。中国側と日本側との間にどんな交渉があったか、簡潔にたどることにする。

八月一日、請益僧円仁と留学僧円載は台州国清寺への旅行の請願文書を大使に提出、翌々日、揚州の府庁に回送された。四日の午後、揚州の府庁から質問文書が来た。その内容は、

「還学僧円仁、沙弥惟正、惟暁、水手丁福満、右台州国清寺に往くを請うは、師を尋ねて便ち台州に住するか、復、台州より却り来たり、

上都(長安)に赴いて去く為か。」円仁は次のように答えた。

「国清寺へ行くを請うは師を尋ねて疑を決するなり。若し彼の州に師なければ、更に上都に赴き兼ねて諸州を経過せん。」

この希望は揚州府から長安の朝廷に転送された。揚州大都督の李徳裕の考えは、府で旅行許可を出すのではなく朝廷の判断に委ねる方針であった。

八月十日、円仁らは旅行に携える荷物の重量を遣唐使本部に届け出た。外国人旅行者の荷物の重さをチェックすることは、唐の国内法の規定であった。円仁らはいつでも出発できるよう準備を整えた。藤原大使は円仁の滞在期間が短いことを心配して、勅許を待たずに天台山に向かわせたいと文書で要請した。数日後、李徳裕から「且く発するを許さず」との返書が来た。また、円仁らの待機場所として開元寺を指定した。円仁らは開元寺に移動して、出発の許可を待った。

九月十六日、長安政府の判断を伝える李徳裕の文書が届いた。内容は藤原大使が長安で皇帝に謁見したときに上奏して許可を得よ、というものだった。

九月二十九日、円仁は藤原大使から、李徳裕との交渉の様子を聞いた。天台山行きは勅許の出るまで待て、と重ねて告げられたという。遣唐使本隊が長安に出かける直前に、長岑判官は天台山行きの請願文書を朝廷に届けて公験を得させる、と円仁らを励ました。

十月五日の朝、藤原大使ら一行四十三人は五隻の船に分乗して長安を目指して出発した。残留した邦人は円仁を含めて二百七十人であった。

十一月八日、李徳裕は円仁の寄宿している開元寺に來臨した。三尺の釈迦仏像を拝礼の後、円仁と円載を呼び、安穏か否か尋ねた。前後左右には歩兵二百人、護衛の士官四十人余り控えていた。寺の外にも大勢の文官武官が待機していた。

十一月十六日、円仁は李徳裕に上書して八日の慰問に謝意を表し、贈り物をした。水晶の念珠二連、銀装の刀子六振、斑竹の柄の毛筆二十本、法螺貝三個を、李徳裕の幕僚沈弁を介して届けさせた。翌日、沈弁が法螺貝一個を除いて贈り物の大半を返しに来た。かえって李徳裕の方から、白絹二疋、白綾三疋を贈ってよこした。翌十八日、李徳裕は再び開元寺に姿を見せた。李徳裕は瑞像閣の上に円仁と円載を招き「倶に椅子に坐して茶を喫り」ながら次のような会話を交わした。

「貴国は寒いか。」

「夏は暑く、冬は寒いです。」

「ここと同じだね。僧寺はあるか。」

「たくさんあります。」

「どのくらいあるか。」

「三千七百ほどあります。」

「尼寺はあるか。」

「たくさんあります。」

「道士はいるか。」

「道士はいません。」

「お国の首都の周囲は何里あるか。」

「東西十五里、南北十五里です。」

「夏安居はあるか。」

「あります。」

このように膝を交えて隔てのない会話をしても、円仁らの天台山行きについては何の進展もなく、開元寺に足止めされたまま、開成三年は暮れた。

大使等の一行は、十二月三日、長安の東門の東に到着、皇帝の使者の出迎えを受けた。大使は東街の長興坊にある礼賓院に入り、国賓として接遇された。他のメンバーは皇城内にある鴻臚館に入った。一月十三日、二十五人が招かれて内裏に入った。円仁の日記には記されていないが、唐の監使を通じて、国信物などの朝貢品を天子に献じ、唐帝の勅語を受けたことであろう。文宗皇帝に謁見したときには、五カ国の使節が並び、日本は南詔国に次ぐ二番の席次であった。南詔国はタイ族が雲南地方に建てた国である。

一月十三日、藤原大使は皇帝に謁見した日に、日本僧たちの天台山行きの許可を求めて上奏した。これに対して、天台留学僧の円載は許可されたが、天台請益僧の円仁は不許可になった。その結果を円仁が知ったのは、二月八日の長岑判官の書簡によってである。朝廷の回答は次のようなものであった。

「使者の帰国の日近し。揚州より台州に至る路程は遥遠なり。僧、彼(台州)に至って帰期を求むるに、計るに使等の解纜(出港)の日に逢うを得べけんや。仍って台州に向かうを許さず。但し其の留学増(円載)一人は、台州に向かうを許し、五年の内、宜しく終わるまで食糧を給すべし。

円載の天台山行きには、五年間の公的食糧支給が保証された。一方円仁は、大使一行と共に帰国せざるをえなくなった。留学僧と請益僧という身分の違いが明暗を分けることになった。円載が天台山へと旅立った二十八日の日記は、「別れを惜しんで惆悵す。」と記している。落胆したのは円仁のみならず、藤原大使や長岑判官などの幹部も同様であった。中国人の中にも同情する者がいた。二月五日、天台山から来た敬文は筆談でこう記した。

「最澄和尚の弟子よ。勅未だ下らざる前に、何ぞ且く天台に入って待たざるや。(中略)国に帰らば如何ぞ更に従容たるを得んや。」

公式行事を終えると大使らの一行は直ちに長安を後にした。一ヵ月後の二月十二日、楚州(淮安)に到着。途中で健康を損ねたものが多かったなかで、判官の藤原豊並は死去した。二月二十六日、大使は長安の朝廷から官職を授かった。「大唐国雲麾将軍検校大常卿兼左金吾衛将軍員外置同正員」正従三品相当の官位である。三月十九日、楚州長官は送別宴を開いた。藤原大使は出席しなかったが、判官以下の高官は出席した。三日後、九隻の船に分乗した使節団は、楚州の高官の見送りを受けて海上に出た。船の向かう先の、海州、登州の州庁に対して、一行の食糧や必需品を補給すよう、勅令が発せられた。

帰国に向かって動き始めたころ、円仁は中国に残り、あくまでも求法を継続したい旨の決意を文書で藤原大使に伝えた。大使の返書は、「如し留住を要せば是、仏道の為なり。敢えて意に違わず。住するを要せば即ち留まれ。但し此の国の政は極めて峻し。官家が知開せば便ち違勅の罪に道われ、擾悩することあらんか。但だ能く思量すべきのみ。」

比叡山の期待を担って命をかけて中国に来ながら、本願を遂げずに帰る円仁の無念さを深く理解した言葉である。円仁が留住を決意したとき、彼は請益僧の身分を捨てて、不退転の求法僧として行動を開始する。次の章では、なぜ天台山行きが実現しなかったか、理由を考えることにする。

四　なぜ天台山へ行けなかったか

時間と距離と人為的な要因の三つの側面から考えられる。まず、時間の問題については、請益僧ならではの制約があった。入国と出国は遣唐大使らに合わせることが義務付けられていた。大使らの在唐期間は長くても一年である。その間に求法と巡礼を果たす必要があった。滞在期間を延長できないとすると、第一に上陸地点から天台山までの距離が問題になる。上陸地点が遠ければ不利になる。第二に、公的機関や有力者の支援が得られるかどうか問題になる。特に、外国人旅行者がいくつかの州を旅行する場合、公験(旅行許可書)をすみやかに取得できるかどうかが鍵になる。公験を発行するのは、地方の州庁であるから、円仁の場合は、揚州都督の李徳裕の裁可を必要とした。しかるに、李徳裕は自ら公験を発行せず、皇帝の勅許を得るよう指導した。その方針と事情について問題にしなければならない。第三に、間接的な理由であるが、当時の時代環境として、仏教への風当たりが厳しくなりつつあったことを挙げたい。以上の理由のうち、第一は自然的な要因であり、第二第三は人為的な要因となる。以下に若干の説明を加える。

1　上陸地点の問題

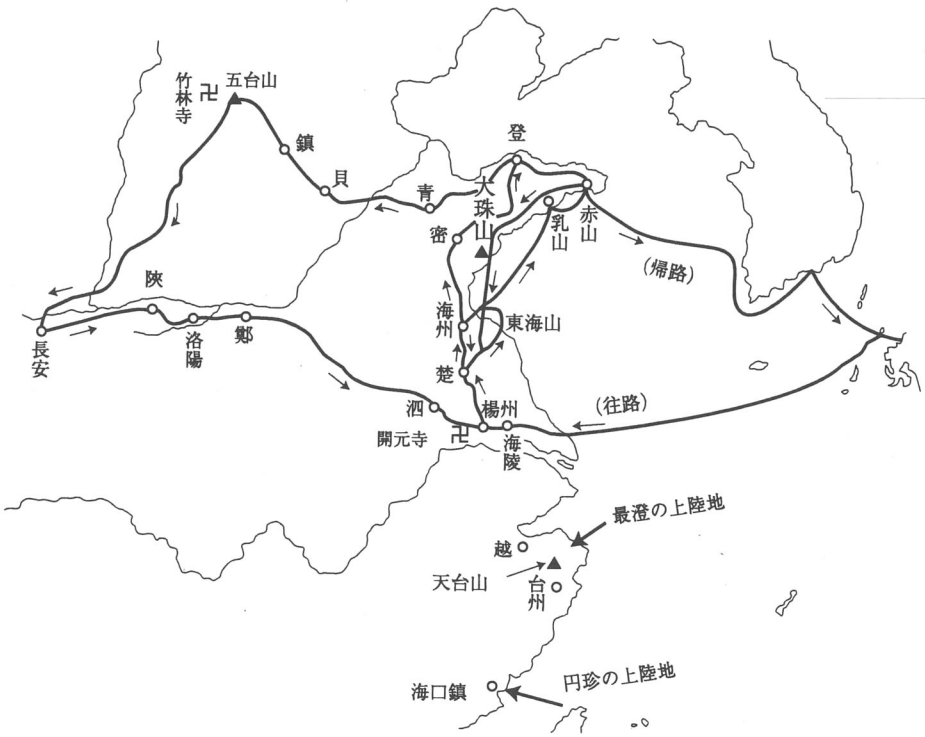
遣唐船には、百五十人近い人々が乗り組み、そのうちの半数以上は水夫であった。しかしながら、木造帆船の推進力の主体は風であり、人力は補助的に使われたにすぎない。東支那海を横断する航路をとれば、季節風の力と向きが船の着岸地を左右した。上陸地点を選ぶことは、よほど順風に恵まれなければ至難のことだった。

円仁の第一船は、地図にあるとおり、淮南道揚州の海岸に漂着した。一行は揚州府の保護安置を受けた。揚州は江南の交通の要衝であるから、国使として大使等が長安へ行くには都合がよかった。しかし、円仁のような個人旅行者が国清寺へ行くには、通過する江南東道の潤州・台州の公験を、現地の観察使(州長)から取得する必要があった。出発地が天台山から遠いほど、込み入った手続きが必要なので、揚州に上陸したことは地理的にみて不利であった。海路、台州に入る方法

もありうるが、念頭になかったようだ。

ちなみに、同じく天台山を目指した最澄の場合は、天台山に近い明州の寧波(地図参照)に入港、明州と台州の公験を取得して、上陸してから四十三日後に到着した。

円珍の場合は、唐の商船に乗って福州(地図参照)に漂着したあと、福州、温州、台州の三つの公験を取得して、五カ月後に天台山に着いた。最澄に比べると時間を要したが、彼の場合には、私度僧ゆえに滞在期間にさしたる制約がなく、日程を自由に組み立てることができた。



円仁の入唐求法経路概略図

最澄は約一ヶ月半後に天台山に到着した。円珍は福州から五ヶ月をかけて入山した。円仁の場合は、旅行距離は円珍に近い。同じくらいの時間がかかるとすれば、揚州と天台山の間を往復することは、日程に余裕がなかったとみられる。仏典仏具を蒐集し、天台密教に理解を深めようとすれば、短期間で下山せざるを得ない日程に満足できたかどうか。揚州で八ヶ月足止めされて円仁は懊悩した。しかし、天台山へ行けなかったことによって新局面に遭い、図らずも五台山、長安へと向かう大旅行になったことも確かであった。

2　李徳裕の権限

李徳裕(七八七―八四九)は、揚州に赴任する直前に(八三四―八三七)宰相(同中書門下平章事)をつとめ、人臣の最高権力者として朝政を動かした大物政治家であった。その後『旧唐書』巻一七八の伝によれば「開成二年五月、揚州大都督府長史・淮南節度副大使知節度使事を授けらる。牛僧孺に代わる。……五年正月、武宗即位す。七月、徳裕　淮南より召され、九月、門下侍郎同平章事を授けらる。」とあるように下野したあと、武宗皇帝のときに宰相に返り咲いた。李徳裕が揚州都督および淮南節度使の地位に就いていたのは、開成二年五月から開成五年七月までの、三年二ヶ月間であった。

貴族出身官僚の派閥の重鎮でもあった李徳裕は、牛僧孺・李宗閔といった科挙出身官僚とウマが合わず、いわゆる牛李の党争を演じた一方の旗頭であった。この党争は中央官僚の三分の一を巻き込んだと言われている。李が揚州に赴任していた時期は中央政界から締め出されていた時期に当たる。李徳裕は中央志向あるいは党派意識の強い人物とみてよいだろう。そしてまた、官僚の複雑な人脈の中で生きていた。

円仁が天台山へ行くために公験を申請したのに対して、李徳裕は発行しなかったことはこれまで幾度か述べた。その理由は『巡礼行記』の開成四年一月十七日の条に沈弁と交わした筆談から判明する。

「相公の説く所は、揚州文牒(旅行証明書)を出すとも、浙西道および浙東道に至れば一事を得ず。又相公管理さるる所の八州は、相公の牒(旅行証明書)を以って便ち往還するを得。其の潤州、台州には別に相公あり。各管領するところありて、彼此職を守り、相交らず。恐ら

く若し勅語に非ざれば以って順行するなし。」と。

「彼此職を守り、相交らず。」に注目したい「彼」つまり浙西・浙東の両観察使と、「此」李徳裕とは、行き来がない、交流がないということである。浙西・浙東の両観察使は、李徳裕の反対派閥の官僚が占めていた可能性が高い。円仁が天台山に行くには、勅許というフリーパスを取得するしかないと判断したのは、派閥力学のなかで生きていた李徳裕の限界を示したものである。結局、円仁は政界の複雑な派閥抗争のとばっちりを受けたと言えよう。

最澄や円珍は高官の支援や理解を得て、天台山に入ることができた。揚州都督が李徳裕でなかったら、円仁の天台山行きは成就したかもしれない。

3　仏教に対する逆風

九世紀の中国の政治と社会に暗い影を落したのは前述の「党争」ともうひとつは「廃仏」である。特に、武宗皇帝の会昌年間(八四一～八四六)に起った、仏教の排斥また弾圧の事件は深刻であった。円仁が入唐したのは、その数年前であるが、反仏教的な感情は、体制内に潜行していたとみてよいのではあるまいか。円仁らの受入れ機関の長であった李徳裕について言えば、揚州都督の在任中は態度を鮮明にしなかったが、武宗朝の宰相に就任すると、仏教徒を弾圧する側に回った。そのような人物であるから、円仁らの求法活動を誠実に支援することはなかった。

仏教は外来宗教であるという理由によって、儒教や道教の信奉者には異端視され邪教視される素地は常にあった。円仁の入唐にさかのぼること十九年前に、韓愈は「仏骨を論ずる表」を書いて、学者官僚の反仏教感情を代弁した。権力者は一般に、政治や経済がうまく立ち行かなくなると、不満のはけ口を外に求めようとする。武宗の場合は、体制内の反仏教感情に火をつけた。仏教界にも、弾圧を招くだけの理由はあったのである。

陳舜臣氏は、八百年代の前半に仏教排斥が起った理由として第一に、仏教界に堕落があったこと、第二に国家財政上の再建戦略として仏教への統制や攻撃を強めたこと、第三に道教優遇策の反動として仏教軽視と弾圧があった、ことを挙げている。さらに「廃仏運動の一因には、唐王朝がすでに世界帝国でなくなったという事実が数えられる」という。また「人々の心が狭くなった」「国際性が失われ、体裁のよい表現で言えば、国粋的な傾向が強まった」(注4)と分析している。

円仁の旅行が、空海、最澄、円珍らと比べて辛苦に満ちているのは、仏教への逆風が強い時期に入唐したことに関係があろう。

五　むすび

天台山は遠かった。円仁が大使一行と長安へ行くなら容易だったと思われる。しかし、目指したのは反対方向の沿海の山地であった。最澄における陸淳のような、頼もしい支援者との出会いがなかった。

唐の規則では、通過する州ごとに旅行許可証(公験)を携帯しなければならない。目的地までは、途中五つの州を通過する。揚州大都督の李徳裕が勅許というフリーパスを得るよう指導したのは、理に反することではなかった。しかし今日、彼の対応を妥当と認める説は管見するところ一つもない。小野勝年氏は言う。「若し李徳裕がそうした官僚的態度でなく、融通を多少でも示したならば円仁の天台への巡礼は必ずしも至難ではなかったと考えられる。」(注5)

私見は第四章で述べたとおり、漂着地、李徳裕の権限、仏教への逆風、いずれも円仁にとって不利に働いた。余裕を持って天台山を往復するのは時間の制約があり、無理であった。なんとか国清寺にたどりついても、祖師最澄の遺志に応えたことになるまい。円仁の使命は、天台密教の不振を挽回し、比叡山の教勢の立直しを図ることであった。師が天台山界隈を短期求法して不徹底に終わったことを知っている円仁であれば、師の巡礼コースをたどるような旅で満足すると思えない。

天台山行きが絶望的になったとき、請益僧の資格を捨てる覚悟ができた。帰国船から下りて再上陸するという困難な道をあえて選び、不退転の求法僧となった。そのとき、旅の第二ステージが始まる。

注記

(1) 藤原時平他撰「円仁卒伝」(『日本三代実録』所収)
吉川弘文館　一九五二

(2) 礪波　護「唐代の過所と公験」(中国中世の文物)　京都大学人文科学研究所　一九九三

(3) 佐伯有清　『円仁』五七頁
吉川弘文館　一九八九

(4) 陳舜臣　「党争と廃仏」(『中国の歴史8』三二頁〜三三頁)
平凡社　一九八二

(5) 小野勝年　『入唐求法巡礼行記の研究』第一巻　一六三頁
鈴木学術財団　一九四五年〜一九六九年

(6) 他に利用した参考文献として、
足立喜六・塩入良道　『入唐求法巡礼行記』全二巻
平凡社　一九七〇〜一九八五

「受理年月日　二〇〇一年九月二十八日」